埼玉県教育委員会教育長賞

深谷市立深谷中学校　三年　新　知佳

　みんなが幸せなのが一番

　「みんなが幸せなのが一番なんだで。」

　これは私の尊敬する渋沢栄一翁の母ゑいさんの言葉です。この言葉を実現するため渋沢栄一は多くの制度を改革していくのですが、その内の一つに税制度がありました。周りの人を思いやる心「忠恕の心」でみんなが幸せな社会を作ろうと尽力してくださったお陰で今の社会が築かれています。私は自分の暮らす市の財政を調べました。一番多い歳出は民生費、二番目は教育費でした。民生費とは、子どもたちや高齢者など福祉分野に使う費用。教育費とは小中学校や公民館の経費。つまり市は子供たちや高齢者のために税収の約半分を使っていることを知り、驚いてしまいました。普段当たり前に通っている学校も、この作文の為に本を借りた図書館も、部活の練習で利用したスポーツ施設も、患者さんのもとに急いでいる救急車も、市民を守っている警察署も、病気になったら治してくれる病院も全部「税金」のお陰だったことに改めて気がついたのでした。あたり前だと思っていた私の日常は働く世代の皆さんが納めてくださった税金の上に成り立っていたのでした。そう考えた時私は税金のある社会の仕組みに感謝の気持ちが芽生えてきました。次に、国の税金の歳出の約三割が社会保障費であるということを知りました。私は祖父のことを思い出しました。祖父はＡＬＳという難病の為、自宅で七年間寝たきりの状態で過ごしていました。要介護５と診断された祖父は、訪問介護、訪問リハビリ、訪問入浴、かかりつけ医の往診など沢山のサービスを利用させていただき、充実した晩年を過ごすことができました。そのサービスのほとんどが介護保険料の支援により利用できたのでした。消費税はその介護保険料の財源になっています。私も買い物をすると払っている消費税が、誰かのことを救っていたのかもしれないと考えると少し誇らしい気持ちになりました。「税」があったからこそ祖父はたとえ体は不自由でも心は満たされて幸せな生活を送ることができたのでしょう。

　もし社会を支えている「税」がなくなったら日本はどうなってしまうのでしょうか。学校や図書館も入場料が必要になったり、道路や橋や信号が壊れていても放置されていたり、病気の人が大金を払わないと医療を受けられなかったり想像するだけで恐ろしい世界になってしまうかもしれません。

　渋沢栄一翁はヨーロッパ視察の際に戦争により傷ついた元兵士の治療費を国が保障していると知り社会保障の必要性を感じたのだそうです。私が税について考えたことは現役の働く世代が働けない人を支え、また子どもたちが大人になったら次の世代を支えていく思いやりのバトンがこれからも渡され「皆が幸せな社会」が未来へと続いていくことを心から願っています。